



Title	ヴァシーリー・ボルディレフと日本：一九一九年滞日期を中心に
Author(s)	兔内, 勇津流
Citation	ロシア史研究, 105, 3-22
Issue Date	2021-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/90294">http://hdl.handle.net/2115/90294</a>
Type	article
File Information	Tonai_BoldyrevJapan2020.pdf



[Instructions for use](#)

## ヴァシーリー・ボルディレフと日本

## 一九一九年滞日期を中心に

兔内 勇津流

はじめに

ロシアの軍人ヴァシーリー・ゲオルギエヴィチ・ボルディレフ（一八七五～一九三三）は、一九一八年の暮れに来日し、一九二〇年初めまで日本に滞在した。一九一八年二月三〇日朝、「シンビルスク」号を下船して敦賀に上陸すると、参謀本部ロシア班井染緑朗中佐（一八七八～一九三〇）が彼を出迎え、東京まで案内した。

彼はその後東京を中心に滞在し、日本陸軍の軍人たちや、来日もしくは日本駐在中のロシア人たちと交際しながら一年余りを日本で過ごしたが、コルチャーク政権が倒れ極東に大変動が起こりつつあった一九二〇年一月一七日に日本を出立し、同一九日にウラジオストクの土を踏んだ。

その後、日本軍が沿海州から撤兵するまでの二年九ヶ月間、ウ

ラジオストクの政情は何度も転変したが、ボルディレフはその渦中において、穏健派の軍人・政治家として一定の存在感を示したように思われる。

ボルディレフは、一九二二年一〇月二五日に日本軍が沿海州から撤兵した後もウラジオストクにとどまったが、ほどなく一一月五日にソヴィエト政権によって逮捕された。釈放後、ボルディレフは、自分のロシア革命・内戦期の体験について、日記をもとにした著書『執政政府、コルチャーク、干渉軍』（ノヴォニコラエフスク、一九二五年）を出版した。<sup>①</sup> ここには、一九一八年三月の出獄にはじまり一九二二年一〇月の沿海州から日本軍の撤兵・白系政権の崩壊までの興味深い体験が語られる。この本は、シベリア出兵史を研究する上で欠かすことができない史料でありながら、残念ながらあまり研究されてこなかったように思われる。また、ボルディレフその人についての研究も多くない。<sup>②</sup>

本論文は、ボルディレフの上述の著書を主な材料としつつ、ロシアと欧米の新しい研究を参照しながら、シベリア出兵期、特に日本に滞在した時期のボルディレフについて検討し、内戦の複雑な状況におけるボルディレフの立場、および彼と日本とのかかわりを理解する手がかりを得ようとするものである。

## 一、コルチャーク政権成立までのボルディレフ

ボルディレフは、帝政ロシア陸軍の軍人である。一八七五年にシンビルスク県スイズラン市の鍛冶屋の家に生まれた彼は、ペンザの測量士学校、ペテルブルクの軍事測量学校を経て、一九〇三年に参謀本部陸軍大学校を卒業し、陸軍将校となった。日露戦争に参加し、足を負傷した。その後、参謀本部陸軍大学校教官（一九一〇～一九一四年）などを経て、第一次世界大戦中の一九一六年九月、北部方面軍参謀長となるが、その在職中、プスコフで皇帝ニコライ二世（一八六八～一九一八）の側にあつた時二月革命が発生し、ニコライ二世は退位した。

この年、彼は陸軍中將に進級し、第一二軍第四三軍団司令官、次いで第五軍司令官に就いた。十月革命によりポリシエヴィキが政権を取ると、新しい最高司令官の指示に従わなかったことで逮捕・収監され、「憲法制定会議を通じて表明されるロシア国民の意思だけが私に命令を与える」と述べて軍法会議によって有罪と

されたが、一九一八年三月に釈放された<sup>3)</sup>。

ボルディレフはその後、反ポリシエヴィキ系政治家と軍人の協同を目指してエスエル系一派が結成したロシア再生同盟 *Создание Возрождения России* に参加する<sup>4)</sup>。

一九一八年九月にウファで開催された国家協議会に、ボルディレフはロシア再生同盟を代表して参加し、執政政府の執政官兼ロシア陸海軍総司令官となった<sup>5)</sup>。しかし、執政政府は赤軍の攻勢の前に移転を余儀なくされてオムスクに移動し、一月二日に同地にあつたシベリア臨時政府と協定を結んでそれと合同し、全ロシア臨時政府と称することになった。この時陸海軍相に招かれたのが、アレクサンドル・コルチャーク提督（一八七四～一九二〇）だった。そのわずか半月後、一月一七日夜から翌日にかけての政変により、コルチャークは全ロシア政府を統轄する最高執政官に就き、政権を担うことになる。

当初ボルディレフはコルチャークを政権に招いた当人だったが、このようにしてコルチャークの独裁政権が誕生すると、そのまま職にとどまることをよしとせず、下野して日本に向かった。

なお、コルチャーク政権を誕生させた政変は、それ自体がロシア内戦史の重要な研究テーマであることはいうまでもないが、近年、革命内戦期の陸軍研究で次々と業績を上げつつある研究者アレクサンドル・ガーニンの指摘するところでは、ボルディレフが卒業し、その後教官を務めたこともあるこの参謀本部陸軍大学校の人脈が、オムスクの政変を準備し実行した軍人たちを結びつけ

る鍵であり、校長のアレクサンドル・アンドロゲスキー陸軍少将（一八七六～一九三二）が政変における役割を割り振ったという。ボルディレフがこの陸軍大学校の人脈に連なる有力人物だったことは疑いない。ただし、政治的傾向の相違により陰謀から外され、彼の不在中に事件が起こるようにセットされたのである。<sup>6)</sup>

## 二、来日直前のボルディレフと日本

コルチャーク政権から距離をとったボルディレフは、翌一二月に来日する。彼はなぜ来日したのか。そこには彼なりの状況判断と、人間関係があったように思われる。<sup>7)</sup>

すなわち、状況判断としては、コルチャーク政権がそのままではボリシエヴィキとの闘争を勝ち抜く力がなく、連合国の支援を必要とする。その中で実質的な支援が可能なのは日本であろうという判断である。また、来日に当たって、ボルディレフは極東の経済界からの支援を受けていた。<sup>8)</sup>

一月末、ボルディレフはオムスクを離れて極東に向かった。途中チタで、当時ザバイカルを実質的に支配しコルチャークの政変が起こると当初これを認めない立場を取ったグリゴリー・セミョーノフ（一八九〇～一九四六）と面会し、一二月二日にウラジオストクに入った。

同地でボルディレフは、イギリス軍のアルフレッド・ノックス

陸軍少将（一八七〇～一九六四）やパーヴェル・ロジャンコ陸軍大佐（一八八〇～一九六五）と会食し、ウラジーミル・ドマネフスキー元沿岸アムール軍管区参謀長（一八七八～一九三七）、ハリトン・ブテンコ・ウラジオストク要塞司令官（一八七八～？）をはじめとする、ロシアの軍人たちとも交際した。

日本人では、先ずウラジオ派遣軍参謀の荒木貞夫陸軍大佐（一八七七～一九六六）と面談する。荒木は第一次世界大戦中観戦武官としてロシアに派遣された経歴があり、ボルディレフとはすでに面識があったかも知れない。彼は、ザバイカルを沿海州に併合する問題を軍事的観点から論じ、日本側に軍事援助の用意があることを語ったという。<sup>9)</sup>

次いで、ボルディレフは二月一四日に渡辺理恵駐ウラジオストク領事と会談した。この時、田中義一陸相（一八六四～一九二九）がペテルブルク駐在武官だった時代、渡辺がその通訳を務めた昔話が出た。

二月二〇日、ボルディレフは大谷喜久蔵連合国軍総司令官（一八五六～一九三三）と中島正武ウラジオ派遣軍参謀・陸軍少将（一八七〇～一九三二）を訪問する。中島は大戦前に駐露大使館付き武官を務めた経歴があり、すでに面識があった可能性があるが、ボルディレフによる彼の評価は「狡猾なアジア人で、大策略家として評判だ」と、非常にネガティブである。

翌二二日、松平恒雄ウラジオ派遣軍政務部長（一八七七～一九四九）と渡辺理恵が来訪する。日本滞在の希望を聞いて二人

は喜んだという。一方のボルディレフ本人は、自分で日本と日本人を見たいという希望を持っていた。

一月二六日、ボルディレフは、アメリカのシベリア派遣軍司令官ウィリアム・S・グレーヴス陸軍少将（一八六五～一九四〇）と長時間話し込んだ。

同月二八日、出発直前にボルディレフはドミトリー・ホルヴァート中将（一八五八～一九三七）をあいさつに訪問すると、「シンビルスク」号で敦賀に向かった。

### 三、日本滞在前期（一九一九年冬～春）のボルディレフ

一九一八年暮れの来日時、井染中佐が彼の受け入れにあたったことはすでに述べた。

その後ボルディレフは田中義一陸相、上原勇作参謀総長（一八五六～一九三三）をはじめとして、首脳部を含む何人もの日本陸軍関係者と次々に面会し、陸軍の学校をいくつか視察した。当然これには陸軍としての意向があったであろう。

すなわち、一月七日、参謀本部を訪問して宇垣一成総務部長兼第一部長（一八六八～一九五六）、上原勇作参謀総長、福田雅太郎参謀次長（一八六六～一九三三）に面会する。上原はフランス語が上手だったが、ボルディレフはロシア語で話し井染に通訳してもらったことを選んだ。

翌一月八日、ボルディレフは滞在するステーションホテルで福田参謀次長、井染中佐と朝食。シベリアで反日宣伝が行われているかどうか、コルチャークとセミノフの関係はどうか、アメリカがシベリア鉄道を占有する意図があるかどうかが話題になった。

ボルディレフは、日本はシベリアで何を達成したいのかと質問し、目賀田種太郎（一八五三～一九二六）を委員長とする臨時西比利亜経済援助委員会について質問したが、二人は微笑して、軍人にはわからないと言ったという。

一日おいて一月一〇日、ボルディレフは陸軍省に田中陸相を訪ねた。田中とは日露戦争前から旧知であり、ボルディレフはその仕事ぶりを信頼していた。田中はロシア語ができた筈であるが、すでに忘れていたのか業務としての必要からロシア語を話さず、井染が通訳した。ここで田中は、いまは軍人というより政治家なのだと言った。これについてボルディレフは、「もし彼がそうした政治家ならば、原氏「首相」は彼に貴重な協力者を見出したことになる」とコメントしている。

田中との会話で取り上げられた話題はいつものようなものであるが、鉄道管理が特に問題になった。法的にはロシア人が管理すべきであるが、田中は、輸送を円滑にするために日本人のおもてなしを活用すべきと言ったという。ボルディレフはそれ以上書いていないが、これが田中の本心かどうかは疑問である。

この他軍事援助について、田中は、国民性として日本人は、頼

まれていないところには行かない。バイカルまで行ったのは誰かが頼んだからだと述べ、成功するためにはしっかり軍事行動の準備をすることが必要だと述べた。ボルディレフはこれに対して、連合国は実際に援助のために来ている証拠を、住民に早急に示す必要があると述べた。田中は、これには大方同意すると述べつつ、その意見を変えなかったという。

田中と会談してボルディレフは、今のところ日本軍はバイカルを越えて進出する意図がないと聞き、また、何かを奪い取ろうという意図はないと聞いて安堵した。

また、ヴァシーリー・クルペンスキー駐日大使（一八六九―一九四五）について、自分「田中」はこのごろ親しくしていないが、仲良くするようにと助言されたという。<sup>⑩</sup>田中はまた、興味があつたものは参観できるように計らうとボルディレフに申し出た。たいへん友好的な会談だったという。

翌一月一日、ボルディレフは料亭に招待された。福田参謀次長が主宰者で、井染の他、数人の将校がいた。この席でボルディレフは、萩野末吉陸軍中将（一八六〇―一九四〇）と出会う。萩野は二〇歳代の若い時にウラジオストク駐在武官を経験し、一九〇七年二月から一九一〇年五月まで在ペテルブルク公使館（一九〇八年以降は大使館）付き駐在武官を務めたロシア通の軍人だったが、一九一四年に陸軍中将進級と同時に予備役に編入され、この時、ウラジオ派遣軍司令部付きとして現役に復帰したところだった。

萩野はロシア語に堪能であり、気質的にも通じるものがあつたのであろう。その後ボルディレフを自宅に招待するなど、ボルディレフが日本滞在中に最も親しくした日本軍人のように思われる。

翌一二日、ニコライ堂を訪問した後、ボルディレフはホテルで萩野と面談した。この時は、参謀本部として取り上げる案件があつた模様である。

この時、ボルディレフは萩野に対して、これまでの対応から見て日本軍の司令部は、自分が再度ロシア軍総司令官になると見ているようだが、自分にはコルチャークやオムスク政府を妨害する気がないと話すと、萩野は困惑したようだった。

そこでボルディレフは話題を転じ、現在の極東の状況において、ロシアの世論を好意的な方向に転換するため、日本軍は、各種の措置を講ずる必要があると述べた。

ボルディレフによると、萩野は、ウラジオストクから帰任した中島正武の後任であり、ロシアに害悪をふりまいた中島の交代は望ましいという意見だった。<sup>⑪</sup>萩野について言えば、最も好意的な将官だが、ロシアに対する共感がどのくらい本物かはわからないと、やや距離をとっている。

一月二五日、ボルディレフは井染と軍関係施設見学プログラムを調整した。この時井染は、セミョーノフとイヴァン・カルムイコフ<sup>⑫</sup>（一八八八―一九二〇）のまわりには大軍があり、オレンブルク戦線に動員するのが望ましいが、では誰が率いるのがよいか、



とボルディレフに訊いたという。鎌をかけてきたのであろうか。

その後、萩野が来て、上野公園を案内されて西郷隆盛像を見た後、食事と会話を楽しんだ。萩野は、薩長閥や原首相、田中陸相、上原参謀総長、元老など、日本の政治・軍事の仕組みについてここで語った。

一月一八日、萩野、上原などと参謀本部の関係者と角力見物し、海軍軍令部の将校たちを紹介される。

一月二〇日、井染と軍の学校（陸軍士官学校だろう）と幼年学校を訪問。将校教育の実情について詳しい説明を受ける。ボルディレフには、ロシアの陸軍大学校教授の経歴があり、軍人の養成に高い関心があった。

一月二一日、萩野の自宅を訪問。ウオッカやお茶で歓待され、二人だけで懇談する。なお、ボルディレフの本の中で、これ以外に日本人の自宅を訪問した記事はない。

一月二二日、陸軍大学校を訪問し、校長の浄法寺五郎中将（一八六五～一九三八）にあいさつした。副官から学校の概要について説明を受ける。井染が同行した。夕方、福田参謀次長の招きにより、駐日ロシア武官たちとともに帝国ホテルで夕食会。ボルディレフは、自分は何の組織も代表していないが、個人として招待いただけたことに感謝すると述べたが、発言の意図が伝わったかどうか、福田のあいさつからはおぼつかなかったという。

一月二三日、自動車で習志野の騎兵旅団を訪問した。井染とグコフスキー副官が同行した。田村守衛騎兵第一旅団長・陸軍少将

（一八七二～一九二三）と懇談する。

一月二四日、陸軍歩兵学校（千葉県都賀）を訪問。参謀本部員の沢田茂大尉（一八八七～一九八〇）が同行した。校長の河村正彦陸軍中将（一八六八～一九二四）にあいさつ、同校の砲術の授業を聴講する。次いで陸軍野戦砲兵射撃学校（千葉県四街道）を訪問。帰りに石坂善次郎陸軍少将（一八七二～一九四九）に遭遇する。

翌一月二五日、ボルディレフはクルペンスキー大使を訪問して、意見を交換する。ここで、疎遠になってきたことを懸念しているという、田中からの話を伝えた。

少しおいて一月二九日、ボルディレフは田中陸相から洋式の昼食会に招待される。陸軍次官、参謀総長、同次長など、陸軍の中樞部と並んで、ヴァシーリー・ステパノヴィチ・クルバートフ（ザヴォイコ）大佐<sup>13</sup>と再会した。

夕刻、クルバートフが立ち寄る。ボルディレフは、彼に日本軍と密接な連携があるような印象を受けた。クルバートフの姿勢は、極東における実力者は日本しかなく、その他の国がポリシエヴィズムに捉えられるのは時間の問題だ、という考えから出発していた。

クルバートフは、コルチャーク政権は破滅するものと見ていた。また、連邦制を熱烈に支持していたという。ボルディレフは、明日、手紙や日露協定案などを見せてくれるよう、彼に頼んだ。

一月三〇日、森俊六郎大蔵省理財局長<sup>14</sup>（一八七七～一九五七）

が来て、再度目賀田との会見依頼があり、受諾した。

その後クルバートフを訪問する。そこにはアメリカの財閥モルガンからの手紙があった。またこの日、クルバートフは上原参謀総長から日露協定草案を披露されたという。

ここで重要な仮定は、日本だけが実力を持ち、他の諸国よりも長くポリシェヴィキ主義に対抗するということである。こうした状況は、日本の関心を近隣のいくつかの島に向けさせ、日本の必要とする原料を獲得する優先権を供与しつつ、利用されるだろう。われわれの側から、領土的譲歩について何かを語ることはあり得ないと、ボルディレフは記した。

クルバートフは、この問題の検討に参加するよう頼んできた。どう対応したかボルディレフは書いていないが、とりあえず彼はこの件を引き受けたものと思われる。

一月三十一日の夜、クルバートフが来て、日本の評価の方向が大きく転換したことについて大使館の文書を持ってきた。これについてクルバートフとボルディレフは同意見だった。また、クルペンスキーは、田中へのアプローチが容易になったことに満足したようだった。

日露協定の草案を見たが、ボルディレフの考えに大きく相違する部分はなかったという。問題は、物資や財政面の支援ではなく、協定を実施する上で必要なものを日本が与えることができないことだとボルディレフは記す。クルバートフはボルディレフに質問した。「これに署名できますか」「ならば、誰がこれを実行して

くれるのか。あなたはこの文書をオムスクに持って行きたいだろうが、わたしは現状ではオムスクと協同できない」。ボルディレフはこれに署名しなかった。

クルバートフはまた、ラヴル・コロニコフ<sup>(15)</sup>（一八七〇〜一九一八）とアレクセイ・カレージン<sup>(16)</sup>（一八六一〜一九一八）について話した。彼等は熱烈な愛国者だが、柔軟性に欠けて滅んだ、というのがボルディレフの評価である。

二月一日、森と一緒に貴族の集会（貴族院もしくは華族会館であろう）に赴き、目賀田種太郎と会談した<sup>(17)</sup>。政治・経済の交流促進について話した。ボルディレフから、①運輸の改善について日本はどのくらい援助を提供できるか、②どの程度信用を供与して広範な通商関係をつくれるかと質問した。その答えは、車両の供与はできない、貧しい日本に多額の信用供与は実施できないなど、ネガティブなものだった。ボルディレフは、目賀田は大なる親米派だと見た。

この会見以後、ボルディレフの日本に対する意識は次第に変わっていったように感じられる。参謀本部系の軍人たちの政治的立場や情勢認識の違い、さらには日本の政財界のスタンスを見て、日本の援助を得ればポリシェヴィキを打倒して新しい民主政権を樹立できるという、単純なことではないと考えるようになったというのである。また当然ながら、シベリア・極東を含むロシア各地の情勢も、大きく変動しつつあった。

細谷千博は、コルチャーク政権の成立から一九一九年初めにか



けての日本のシベリア政策について検討し、出兵初期のセミヨールフとホルヴァートの支援により、「傀儡的な親日政権の樹立による極東三州の「緩衝地帯」化を志向」した政策が、原内閣の成立、コルチャーク政権の成立を経て変化し、コルチャーク政権承認に舵を切ったと論じた。その変化を政府の方針として明確化したのが、一九一九年一月二六日に閣議決定した「対露方針要綱」であり、同年五月一六日の、連合国政府に対するコルチャーク政権の仮承認提議である。<sup>(18)</sup>

ボルデイレフの日本滞在はこうした時期に当たっており、親日的緩衝国樹立、および極東・東シベリアでの利権獲得をからめながら、日本が極東に進出する上でのカードのひとつとして考慮されたものと考えられる。しかしボルデイレフは、さまざまなチャネルによる連絡はあったにせよ、コルチャーク政権への参加を拒否して来日したわけであり、コルチャーク政権承認に舵を切る日本の立場とは一致しないものがあつたに違いない。これ以後、ボルデイレフと日本の軍人たちとの関係は引き続き継続したと見られるが、接触についての記述は次第に少なくなる。

三月になって、ボルデイレフは「ロシアにおけるポリシエヴィキとの闘争の問題についての短い意見」という覚書を作成し、在京の各国外交団に配布したほか、コルチャークに手紙を添えて送った。<sup>(19)</sup> その覚書の内容が『イストリーチエスキー・アルヒーフ』誌に紹介されているが、そこで注目されるのは、「闘争の手段」

として(a)軍事力(b)内政改革を挙げ、「内政改革」の内容を、政府に対する住民の信頼を得ること、住民の参加する国家と社会を建設することとしていることである。<sup>(20)</sup>

この主張は、コルチャーク政権を含めた白系政権の、ロシアの将来の政体を「事前に決定しない」という立場と相容れないものだった。しかしそのような形で、実質的な君主政支持者である軍人たちを政権の基盤とすることは、ポリシエヴィキ打倒の闘いからエスエルやメンシエヴィキ等を排除し、白系政権の政治的・社会的基盤を大きく狭めることになる。ボルデイレフはこのことに強い危機感を抱き、コルチャーク政権の姿勢転換と連合諸国(特に日本)の支援によって状況を打開したいと考えたことが、この「意見」の背景であろう。

この時、ボルデイレフが「意見」に添えてコルチャークに送った手紙の一部を紹介しよう。

「さらに言えば、わたくしの見るところ、シベリアにおける日本の立場は、他の連合諸国よりかなり複雑です。日本だけがポリシエヴィキと活発に闘っていて、相当の損害も被り、それを議会と社会に対して報告しなくてはなりません。そして同時に、連合諸国の中で占めたいと考えているであろうポジションを得ていないのです。

こうした状況を見ると、日本との協力関係をさらにもう少し深めることは時宜にかなない、状況をロシアのためによい

方向に持っていけることでしよう。

一、ロシア軍の本来の兵力が、ポリシエヴィキと戦い、国内と鉄道線の秩序を保つために十分足りていると考えることは決してできないとすると、連合諸国にポリシエヴィキに対するもつと積極的な活動を促すことが有益ということになります。闘いがだらだらと続くことはわれわれにとって危険であります。闘いがだらだらと続くことはわれわれにとって危険であります。闘いがだらだらと続くことはわれわれにとって危険であります。闘いがだらだらと続くことはわれわれにとって危険であります。

こうした点から、他国との協力はいかに厳しいものであっても、ポリシエヴィキの膿を早く切開することで正当化され、ロシアを一年半にわたって苦しめている長引く内紛の中で、最終的には犠牲を少なくすることでしょう。

当地「日本」の軍人たちは、他の連合諸国の同意が得られ、必要な金銭的・物質的支援が受けられるという条件付きですが、もつと活発に「反ポリシエヴィキ闘争に」働くことに同意するように思われます。日本の「田中義一」陸相は最近、ポリシエヴィキとの闘争にシベリアで必要な兵力は、もちろんしかるべき装備をそろえた上で、十五万だと発言しました。この考えは支持できるものです。

二、極東におけるアタマン問題は、おそらく日本を悩ませており、その良好な解決が望ましいのはもちろんのことです。

三、第三の問題についても、少し言わせてください。それ

は人民代表制のことです。政府の権力が実質的に及んでいる州だけであつても、それらの州の代表機関の選挙をただちに策定し、公布することが時宜にかなつていと思われ(22)ます。」

(以下略)

ボルディレフは、コルチャーク政権をはじめとする白系運動の現状に対する強い危機感から、あえてこのようなメッセージを送り、コルチャーク政権と、それを承認すべきかどうか逡巡する連合諸国に、方針の再考を求めたということであろう。なお、これに対するコルチャークの返書の存在は伝わっていない。

#### 四、日本滞在後期(一九一九年夏、一九二〇年一月)の

##### ボルディレフ

日本からロシアの情勢を見ていたボルディレフは、八月ごろのこととして次のように述べる。

このころまでにわたしには、日本軍を含めて連合諸国がウラル戦線にまともな軍を送ることはないだろうこと、そして、この戦線の運命とオムスク政府の運命は、もう先が見えたことが明白になつた。(略)

日本軍の駐留するイルクーツクまでの反ソヴィエト運動

は、敗北したと考えなくてはならない。ただ時間の問題なのだ。そういうことで、もうすでに極東三州（ザバイカル、沿アムール、沿海）において、闘争の新しい局面が芽生えることになった。

オムスクおよび西シベリア全体を失ったなら、もしその軍を維持することができ、それをバイカルの向こうに移したとしても、コルチャークとその政府はとも権力を保つことはできない。

上に挙げた三州の政権交代、もっと正しく言えば、この地方が、内戦の終結まで外部からの侵犯から完全に保護されるような新政権の樹立という、当然の問題が生じる。最後に述べた危険は、きわめて深刻である。

日本の軍部のたいへん積極的な部分は、これらの諸州をセミヨーフのもとで、日本の保護のもとに統一したいとほめかしている。この結合の結果は容易に見て取れる。このロシアにとって非常に貴重な地方を切り離す口実は、いろいろあり得る。日本軍がすでに提起した緩衝国の構想は、自分たちの影響下にある北部満州と朝鮮に「ポリシエヴィキの伝染病」が入るのを阻止する目的で、これらの諸州を隔離する十分な根拠となるだろう。

セミヨーフの擁立は、アタマンに奉仕し、白系の「オアシス」をつくることを夢見ていたロシアの反動グループの要望に応えるもので、そこから最終的には、モスクワに進撃す

るかも知れず、そして悪い結末としては、好意的な日本の保護下に置かれることになるだろう。

第二に現れてきた、同じく多数の賛同者を集めはじめた潮流は、緩衝国構想に帰結するが、民主的緩衝国ということである。この潮流は、アタマン・セミヨーフが何か指導的役割を示すことを完全に拒否する、いまま極東において重要な役割を演じているアメリカの代表の支持を得ている。アメリカ大統領ウッドロウ・ウィルソン（一八五六一一九二四）の理念はいまも強力で、民主主義の趨勢が優越している。

ゼムストヴォが舞台に引き出されはじめた。日本においても、沿海州ゼムストヴォ参事会の構成に関心が向きはじめた。

この時まで、オムスクと、特にチタに対するわたしのネガティブな態度は、日本人に丁寧な驚きの念を引き起こすのが常で、特に左翼的なのかと疑いをかけた人も何人かいた。それが現在では、しょっちゅうこう訊かれる。「誰がオムスクに、交代に行くのか。この関係では、沿海州ゼムストヴォのチャンスはどのくらい大きいのか？」<sup>(23)</sup>

ここから、ボルデイレフがコルチャーク政権後を見据えて、極東に民主的緩衝国の可能性を見ていたこと。日本においても、コルチャーク政権の頹勢が伝えられ、関心を集めていたこと。そして、ボルデイレフが日本の対露政策（特にセミヨーフ支援）に対して相当批判的になつていたことがうかがえる。

一九一九年八月九日、『ジャパン・アドヴァタイザー』紙はボルディレフの「ロシアの人民は絶望的状况にある」と題する談話を掲載した。<sup>24</sup>

「今日のロシアの状況の悲劇は、人民が、相容れない目的を持ったふたつの勢力の間の板挟みの場所にいることである」。さらにボルディレフは、次のように述べる。「いまや人民は、嘘つきのかものなっていることに気付いたが、その抵抗は、テロリズムと暴力に直面している。その一方、古い秩序と生活条件を回復しようとする動きがあるが、この運動の指導者たちは、再建に声をあげる人民の権利を無視している。彼等は人民の声を聞くことがないし、全体としての人民に信頼をおくことがない。当然ながら、人民も彼等を信頼せず、しかし、何か対立があると厳しい弾圧を受ける」。

このような認識を示したボルディレフは、さらに以下のように話を展開する。

「ロシアの情勢についての質問に答え、未来のことを引き出すために自国の複雑なできごとを関連づけることは、きわめて困難なことだ。しかし、わたしにとって完全に明白なことは、ロシア国家機関の再生の源は、ロシア人自身の中に存するということであり、数世紀にわたって蓄積されてきた国民の潜在的エネルギーを最大限に活用することが、指導者たちの一部となるべきである」。

そして、ロシア人民は自らを統治する政治的能力がないという

意見を斥け、大戦の経験を経て多くのことを判断できるようになったとして、次のように述べる。

「現在、ロシア人は両方から圧迫され、どこに助けを求めてよいかわからず、無秩序に陥るか、または完全な無気力状態にある。それが、現在内戦において成功と困難が交互に現れ、結局が見通せず、国がまったくの廃墟になるまで、闘いがいつまでも続くことが恐れられる理由である。双方とも、現在、相手を退場させ、多数者にその意思を断固押しつける力を欠いている。外部からの援助は、この状態を変えてくれるかも知れないが、いくつかの理由から、調子が合うように行われていない。しかし、わたしは、ロシアの人民は安定した政府の基礎となり得ると、いまま樂觀的に信じており、このナショナルセンターが、階級や党派的区分なしに、健全な分子から構成されることになると思定している」。

これは、当事のボルディレフの基本的な状況認識とスタンスをよく表す記事であり、それと同時にアンドレイ・アルグノーフ（一八八六―一九三九）ら、ロシア再生同盟に参加した人々の立場をまさに代弁するものだった。<sup>25</sup>

この記事の公表は、大使館を驚かせた一方、すぐさま翻訳がオムスクに届けられるなど、シベリアのさまざまなグループとボルディレフをつなぐきっかけとなった。

その一方で、日本の客として滞在中のボルディレフにとって、さまざまな誘いを受ける中には、ロシアの利益を損ないかねないものもあったため、記事の公表は、その立場を面倒にするもので

もあつたといふ。<sup>(26)</sup>

このころ、一九一九年八月から九月にかけて、ウラジオストクで、シベリア自治運動にかかわりの深いエスエル系の政治家イヴァン・ヤークシエフ（元シベリア地方議会議長、一八八四〜一九三五）、ヴァレリアン・モラフスキー（自治シベリア臨時政府の官房長、一八八四〜一九四二）、アルカーヂー・クラコヴェツキー陸軍大佐（自治シベリア臨時政府陸相、一八八四〜一九三七）らは、コルチャーク政権の崩壊を見通し、政権の奪取を画策していた。ユリー・ツイプキンの研究によると、彼等は、コルチャークと袂を別つて八月八日にウラジオストクに入ったチェコスロヴァキア軍団のラドラ・ガイダ（一八九二〜一九四八）をこれに引き込み、連合国軍の支援も見込んで蜂起を計画した。コルチャーク政権の極東代表に就いていたセルゲイ・ローザノフ（一八六九〜一九三七）も参加の意向があつたが、セミヨノフへの対応についてガイダたちと一致できず、互いの行動の自由と情報交換だけを約すにとどまつた。

ヤークシエフたちは、日本滞在中のボルディレフを仲間に加えようと考え、彼に手紙を書いた。ボルディレフの著書の一八九九年一〇月四日条に、ウラジオストクから「非常に興味深い」来信があつた旨の記載がある。一九一九年九月二五日付けのこの手紙の差出人はミハイル・パヴロフスキー（一八八五〜一九六三）とヤークシエフで、臨時政府を設立するため、ボルディレフのウラ

ジオストク入りを求めるものだった。「全国会議 Земский съезд に責任を持つ臨時政府の設立」の呼びかけを含んだ「シベリア地方議会議長の書簡」と、一九一九年七月七日にイルクーツク県ゼムストヴォ第一回定例会で採択された、オムスク政府の問題点を指摘し、地方議会の招集を求める決議が同封されていた。

この時、ボルディレフは強い関心を示しつつ、ヤークシエフらの求めには応じなかった。用心深さが必要だと書いている。いろいろ懸念することがあつたのである。

さて、ローザノフは、一度勧誘を受け協定まで交わしたこともあり、ガイダやヤークシエフらの動静をよく把握していたのである。十一月一七日、ガイダはウラジオストクで蜂起した。しかし、ローザノフ側があらかじめ要所を確保していた上、連合国軍の支援が限定的で、ローザノフによる掃討に介入しなかつたことが大きかった。蜂起はまもなくローザノフ政権によって鎮圧され、ガイダは負傷して国外に逃亡した。<sup>(27)</sup>

秋に入って一〇月一二日、ボルディレフは滞在していた鎌倉から東京に出て、橋本虎之助陸軍少佐（参謀本部付き、一八八三〜一九五二）、福田参謀次長、高柳保太郎ウラジオ派遣軍高級参謀・陸軍少将（一八七〇〜一九二三）、その他参謀本部員五人、および頭本元貞ウラジオ派遣軍弘報局主幹（一八六三〜一九四三）と懇談した。

この席で、日本側はハルビンに中国の勢力が強まっていること



に懸念を表し、北滿への展開の障害になっていると述べた。ボル  
ディレフの共感を得ようとしたのであろうか。ボルディレフは、  
オムスク政府への借款が成立しないことの理由を質問した。政府  
承認問題が障害になっているなら、なぜ承認できないのかと。こ  
れに対しては、地下資源の開発権についてのロシアの法制が障害  
になっているという応答があった。サハリンの油田開発を含む利  
権供与問題で合意できなかったことを示唆するものであろう。

これから二ヶ月後の一月二二日付け『ジャパン・アドヴァタ  
イザー』紙は、頭本元貞の論説「ロシア問題…シベリアにおける  
現在の惨状と解決法<sup>(28)</sup>」を掲載した。この記事は、元は『国民新聞』  
に掲載された記事の翻訳で、概略以下のような内容である。

わたしは、ウラジオ派遣軍弘報局主幹として、一九一八年  
一二月以来何度もシベリアを訪れ、最近はおムスクにも行っ  
て政情を見てきた。

シベリア軍は、五月初めはたいへん順調で、ウラルを越え  
て進んでいた。日本政府が連合諸国におムスク政府承認を呼  
びかけたのはこのころだった。しかし武運は続かず、シベリ  
ア軍はウラルの向こうからシベリアに退却した。現在の防衛  
線は、オムスクから遠くない。シベリア軍が赤軍を撃退し、  
全ロシアを統一する望みは消えた。

オムスク軍の苦境の原因は多くあるが、①参謀長と、右翼

を担当するガイダ將軍の断絶、②デニキン軍との戦略的結合  
の維持をないがしろにして、北ロシアの連合軍との連合に力  
を浪費した、③新兵が多く、訓練と規律が不足、④将校の数  
と能力が不足、⑤戦意不足、が大きい。

シベリア住民のほとんどは、ロシアの統一にほとんど関心  
がなく、シベリアが半独立もしくは自治的民主国になること  
を望んでいる。そのため、徴兵の実施は住民に敵意を生じさ  
せており、こうして集められた兵士には全く戦意がない。イ  
ギリス軍人の話では、負傷して後方に送られる兵士の八割は、  
自傷した者だという。これでは負けるのが道理であり、一時、  
前進できたのは、勝利したからでなく、赤軍が別の方向に兵  
を差し向けたせいだという。

今後、シベリアに政治的大変動が生じることは必然だ。

オムスク政府は、全ロシア統一を目指すコルチャーク派と、  
シベリア自治の方に関心があるヴォロゴツキー派から成る。  
昨年一月のクーデターにより、コルチャーク派が主導権を  
取ってロシアの統一に注力してきたが、悲惨な敗北に終わる  
うとしている。

今後、コルチャークはどうするか。いさぎよく辞職して誰  
かに地位を譲るか、死ぬまで目標を追求するかのどちらかで  
あろう。

それゆえわたしは、今後コルチャークを排除したシベリア  
自治派の政府が成立すると予想する。誰がそのトップに就く



かは予想が難しいが、それは、自由主義の原則をとり人民に責任を持ち、シベリアの自治を望むシベリアの多くの人々から歓迎されるであろう。

ここまでが一二月一二日の掲載分だが、ボルディレフは、当日の日記に、これに強く賛同するコメントを書いた。ここには「健全化した諸州の連合と、内戦の速やかな終結を通じて、統一ロシアを復興する理念が展開されている。特にシベリアに対しては、民主的な州政府と、日本とアメリカという連合諸国との友好的な協調「が重要」である。これは著者と最初に会った時にわたしもまた展開した理念だ」と。

なお、翌一九二〇年一月中旬、頭本はシベリアからの撤兵を主張する意見書を政府に提出するに至る。<sup>(29)</sup>

ボルディレフの著書に見る限りで、この後、日本滞在中の日本軍人との会見は、萩野末吉以外多くない。<sup>(30)</sup>

ボルディレフは、この後の身の振り方に逡巡するところもあつたようだが、コルチャーク政権崩壊後に、極東に「民主的緩衝国」が発生するという予想にかけることに決め、ウラジオストク入りを決めた。<sup>(31)</sup>

このころまでにボルディレフは、日本の協力の可能性に期待することはできないと考えるようになったように思われる。また、日本の官憲当局の方も、ボルディレフを危険人物として観察

の対象としていた。それを示すのが、ボルディレフの動静を報告した警視庁発一九二〇年一月一〇付け文書「外秘乙第五号」という、外務省記録四・三・二・一「過激派其他危険主義者取締関係案件」に収録されている文書である。

この文書は、氏名不詳のロシア人の観察によるとして、ボルディレフの立場と状況を大略次のように説明している。

ボルディレフはエスエル系社会主義者で、シベリアにエスエル系の政権ができればその軍の中枢に入る希望がある。デニキンのところに行くと呼んでいるのはカモフラージュであつて、実際に行けば敵対者として扱われることになり、行く筈がない。

シベリアでセミョーノフが失脚しエスエルの政権が誕生すれば、彼はシベリア入りするが、シベリアがセミョーノフや日本の影響下に入る場合、彼は仲間のいるロンドンに行くだろう。

イルクーツクが過激派の勢力圏に入ると、今後、セミョーノフが東京まで逃げてくるだろうが、これは日本の思う壺だ。「ロシア救援」の名のもと、サハリンを代償に求めてくるだろうとボルディレフは見ている。

ボルディレフは、日本人は全く信用できないという。ロシアの混乱に乗じ、サハリンの占有とシベリア資源の租借権を、旅順の例に倣つて得ようとしているのだ。セミョーノフ、カ

ルミイコフ、ホルヴァートは、日本が金を出している雇い人だ。日本はエスエル党を嫌っていて、援助する気は全くない。<sup>(2)</sup>

ロシア人から聞き出した間接情報であるが、かなり当たっているようである。ただし、当時、エスエルの中がいろいろな立場に分裂していた中で、ボルディレフとその仲間がどのような立場であるかについては、この文書からは伝わってこない。日本の警察当局や陸軍の関係者は、その辺を理解しないままだったのであるだろうか。

そして、ボルディレフは日本の支援に期待することをあきらめた。特に、一月一九日のウラジオストクで日本軍がガイダの反乱の鎮圧に参加したことは、大きく影響したかも知れない。

しかし、動乱の時代であり何が起ころうともおかしくない。礼節を保ち無用の争いを避け、用心深くあることが必要だ。ボルディレフは、離日一週間前の一月一〇日、田中陸相、上原参謀総長、福田参謀次長の三人に礼状を出し、見送りを辞退しつつ、離日を報告したという。その翌日、ボルディレフは萩野の来訪を受けた。この時萩野は、ボルディレフに「向こうはあなたを待っている」と言いウラジオ行きを促した。ここで「事前に陸相や外相といくつかの点で合意しておきたい」とボルディレフが言うと、萩野は冷淡になって、大臣たちが最終的なことを発言できるだろうか。すべては現地でウラジオの大井成元司令官（一八六三―一九五二）が説明するだろう、と述べたという。<sup>(3)</sup>

この面談の数日後、ボルディレフはついに日本を離れてウラジオストクに渡った。

## 五、日本から帰国後のボルディレフ

一九二〇年一月一七日、ボルディレフは敦賀を発ち、ウラジオストクに向かった。この時すでにコルチャーク政権は倒れ、沿海州では、革命派が政権をローザノフから奪取しようとしていた。

こうした中、一月一九日に上陸したボルディレフは、早速ローザノフと会談、次いで二一日に大井ウラジオ派遣軍司令官と会談する。

一月三十一日の政変でローザノフ政権は倒れ、アレクサンドル・メドヴェージェフ議長を首班とする沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府が成立した。共産党の活動が公然化し、三月に入るとモスクワが派遣したヴラジミール・ヴィレンスキー（シビリャコフ、一八八八―一九四二）が到着してロシア共産党（ボ）中央委員会極東ビューローが立ち上がる。革命派はすでに二月中にアムール州と沿海州北部のハバロフスク郡を掌握しており、情勢は大きく革命派に傾いた。

しかし、こうした情勢を一変させたのが四月四・五日に発生した沿海州武力衝突事件である。

ボルディレフは、白軍、赤軍のそれぞれの陣営、日本軍、連合

諸国それぞれの関係者と話ができる立場にあり、こうした激動する情勢の中で、独特の存在感を示すことになった。一九二〇年四月の事件以後、ボルディレフは、実質的な軍を喪失したウラジオストク政府軍の総司令官となり、日本側との交渉のとりまとめ役として、鉄道線から三〇キロメートル以内へのロシア軍の立ち入りを禁じた四月二九日協定の締結当事者となる。

同年六月、沿海州で人民議会が設けられると、議員に当選して議会人としての活動を開始する一方、改組されたウラジオストク政府の軍事担当相に就く。さらに同年一〇月末、極東共和国組織問題で、ウラジオストク政府の代表団がチタに出発すると、留守中の閣議の議長を務めることになった。

しかしその後、ザバイカルを追われたカッペリ軍が中東鉄道を<sup>44</sup>経て沿海州に入ることを求めると、ロシア軍兵士をロシアが受け入れないわけにはいかないと、閣議の決定に反してその入境を許し、閣僚を辞職する。

ボルディレフは、その後一時政府から離れていたが、一九二一年五月二六日の政変によりメルクーロフ兄弟の政権が成立すると、首班となったスピリドン・メルクーロフ（一八七〇～一九五七）の依頼を受けて日露協議会の議長となる一方、リベラル派の議員として活動する。しかし、一九二二年六月にハルビンからミハイル・デーチェリフス（一八七一～一九四二）を政権首班に招くと、あにはからんやここで彼自身が更迭されてしまい、そのままウラジオストクで白系政権の終焉を迎えたのである。

## 六、おわりに

ジェフリー・ホスキングは、最近の論文で主に来日までのボルディレフについて論じ、次のように述べた。「ボルディレフの見解では、軍事力を欠いた政治は無力だが、政治を欠いた軍事力は非常に有害である。彼の望みは、両者を結びつけ、一定の人民の付託に依拠する政治権力を確保することだった。不幸にも、他の白軍の将軍たちで、彼の信念を共有する者はほとんどいなかった。皮肉なことに、ソヴィエトを樹立することでそれに近かったのはボリシェヴィキだった」<sup>45</sup>。

しかし、一九一八年一〇月にコルチャークを政権に招き、一九二二年六月にメルクーロフ政権が退陣するに当たってデーチェリフスを招請したのが彼だったことは、非常に大きな皮肉である。どちらの場合も、民意による政治とは真逆の軍事独裁体制を招き、ボルディレフ自身がそこから身を退くことになり、そしてどちらの政権も軍事力を建て直すことができないまま短命に終わった。

本論文は、主にボルディレフの著書に依りつつ、最近のロシアでの研究を参照しながら、彼が日本に滞在した一九一九年とその後、前後のボルディレフの活動、およびその日本とのかかわりの概観を試みた。ボルディレフはロシア陸軍においてかなりの大物であり、日本陸軍は声望ある白系将官として厚遇するとともに、コネ

クシオンを築いて利用しようと模索したものと思われる。また、その媒介者として、日本の政財界とコネクシオンを持つ、ロシア極東部の実業家が介在したもようである。

しかし、ボリシェヴィキに代わる政権として執政政府の軍を率いたものの、たちまちのうちに政変によって権力を逐われ、コルチャーク政権崩壊後、帰国して極東に民主的緩衝国の樹立を目指したボルディレフの立場は、日本軍指導部の志向と合致せず、相互に多少の連絡は持ちつつも、別々の道を歩くことになった。

ボルディレフが再度ウラジオストクに入った一九二〇年一月以降、一九二二年まで展開されたボルディレフと日本とのかわり合いは、シベリア出兵史研究においてならに重要なテーマと見られるが、別の機会に改めて検討することとしたい。

## 註

(1) *Болдырев В. Г.* Директория. Колчак, интервенты: воспоминания (из цикла “Шесть лет” 1917–1922 г. г.). Новониколаевск. 1925. なお、本論文において、この本の本文を典拠とする部分は、日付で該当箇所が示されるため、基本的に註を省略する。

(2) これまで、日本では細谷千博、原暉之、およびエドワード・パウルシエフの研究で引用が見られる。また檜山真一は、ウラジオストクの実業家ヴァシーリー・メエローヴィッチ「檜山の表記ではメエローヴィッチ」が、日本滞在中のボルディレフを支援していたことを指摘した。檜山真一「知られざるニコライ・ネフスキー(二)」『窓』

八一号(一九九二年)、三〇―三三ページ。ロシア、欧米でもボルディレフを扱った研究は多くないが、近年になって、Geoffrey Hosking, “A Democratic White General: V. G. Boldyrev,” *Revolutionary Russia*, 29: 2 (2016), pp. 169–191 が発表された。また、革命・内戦期のロシア陸軍将校の動向を精力的に研究しているアンドレイ・ガーニンの仕事には、ボルディレフに関しさまざまな興味深い言及が見られ、注目される。Ганин Д. В. Попытки советизации Военной академии на Дальнем Востоке в 1920–1921 гг. // Из истории гражданской войны на Дальнем Востоке (1918–1922 гг.): сборник научных статей. Вып. 6. Хабаровск, 2013. С. 79–108; Ганин Д. В. «Академическая группировка»: участие в подготовке и реализации омского переворота 18 ноября 1918 года // Личность, общество и власть в истории России: сборник научных статей, посвященный 70-летию доктора исторических наук, профессора В. И. Шипкина. Новосибирск, 2018. С. 272–294; Ганин Д. В. Семь «почему» российской гражданской войны. Москва, 2018.

(3) *Болди́рев* の経歴については *Волков Е. В., Езоров Н. Д., Кунцов И. В.* Белые генералы Восточного фронта гражданской войны: биографический справочник. Москва, 2003 を参照。彼の裁判の言明については Hosking, “A Democratic White General,” p. 172.

(4) ロシア再生同盟については Scott B. Smith, *Captives of Revolution: the Socialist Revolutionaries and the Bolshevik Dictatorship, 1918–1923*. Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Press, 2011, pp. 38–39 を参照。註五のジェフリー・スウェインの論文を参照。

(5) 執政政府の性格と立ち位置についてスウェインが興味深い議論をしており、ボルディレフの立場や人脈を考える上で多くの示唆を含む。Geoffrey Swain, “The Democratic Counterrevolution Reconsidered,” Christopher Read, Peter Waldron and Adele Lindenmeyr (eds.), *Reintegration – The Struggle for the State. (Russia’s Great War and Revolution. v. 3. Russia’s Home Front in War and Revolution, 1914–*

22. Book 4) Bloomington: Slavica, 2018, pp. 403-424.」の時、ポルディレフに直属の参謀総長になったのが、同じく参謀本部陸軍大学校の卒業生で、赤軍から移ってきたばかりのセルゲイ・ローザノフ陸軍中将だった。コルチャーク政権の成立後二人は別々の道を歩くことになるが、一九一九七月にローザノフはコルチャーク政権の沿海地方長官としてウラジオストクに入り、翌一九二〇年一月、日本から帰国したポルディレフと対面することになる。

(6) Глинн. «Академическая группировка». 内戦期のロシア陸軍將校たちの大多数は地主制支持者で、特にアントン・デニキンの南方軍においてその傾向が強かったという。しかし、將校団の外では君主政は大方の支持を失っていた。こうした状況でとりあえず分裂を回避するため、白系政府においては将来のロシアの政体について「事前に決定しない」方針がとられ、ボリシェヴィキを打倒する時までとごうごうとで、問題が封印された。Ципкин Ю. Н. Гражданская война на Дальнем Востоке России: формирование антибольшевистских режимов и их крушение (1917-1922 гг.). Изд. 3-е, исправ. и доп. Хабаровск, 2012. С. 43. しかし、陸軍関係者のエスエルへの不信感は強烈で、一九一八年一月のオムスク政変を引き起こしコルチャーク政権を樹立するに至った。

(7) オムスク政変の直後、ポルディレフはウクライナに向かうような発言をしていた。そこから極東に方向を転じた状況については、今後検討すべき課題とした。Bondyrev. Директория, Колчак, Интервенция. С. 531 (編集者 Вениамин Давидович Ветман に よる 註)。

(8) ポルディレフは、日本滞在中ヴィソツキーとギンズブルクに何度か会っているが、編集者ヴェーグマンは、彼らが「日本の上層部」などの仲介を行ったとしている。この二人はウラジオストクの財界人と見られる。極東の経済界として、ポルディレフに期待するところがあったのであろう。Bondyrev.

Директория, Колчак, интервенция. С. 538. また、註二で述べたが、ポルディレフの著書に何度も言及されるメエローヴィッチは、やはりウラジオストクの経済人で、日本滞在中のポルディレフを非常に密接に支援した。なおこの後、メエローヴィッチは、元サハリン州知事のドミトリー・グリゴリエフ（一八六六—一九三二）に日本での活動拠点を提供し、一九二一年五月のウラジオストク政変によってメルクローフ兄弟の沿アムール臨時政府が発足すると、その日本代表と副代表を名乗ることになる。外務省記録四・三・一（要視察人及団体）二一六（露国人之部）第二冊「外秘乙第一七六号」（一九二〇年七月八日）、同第四冊「外秘乙第九四一号」（一九二一年六月二三日）等を参照。

(9) 当時、荒木はウラジオ特務機関に配置されていた。参謀本部編『大正七年乃至十一年西伯利出兵史』（復刻版下巻）新時代社、一九七二年。「第一巻附表・附図 復刻版（上）」中の「附表第二十六其二西伯利及北滿洲出動諸部隊職員表」（ページ番号なし）。なお、荒木はシベリア出兵とのかかわりに関しては、Takeshi Tomita, "General Araki Reconsidered: His Views on Russia and Warfare during World War I and the Siberian Intervention," D. Wolff, S. Yokote, W. Sunderland (eds.), *Russia's Great War and Revolution in the Far East: Re-imagining the Northeast Asian Theater, 1914-22*, Bloomington: Slavica, 2018, pp. 153-173. 富田武「荒木貞夫のソ連観とソ連の対日政策」『成蹊法学』六七号（二〇〇八年）一五一—六五ページ、および「荒木貞夫の口述記録——シベリア出兵について」『近代中国研究彙報』四二号（二〇一〇年）に筆者が付した解題（三八—四六ページ）を参照。

(10) ポルディレフの前掲書によれば、彼はすでに一月二日にクルペンスキーと面会し、日本滞在中その後少なくとも一月二四日、同一六日、同二五日、一月二二日の計五回面会している。また、離日前の一二月一三日に手紙を出したという。

(11) 中島正武陸軍少将は、一九一九年一月一五日中午中将に進級し参謀本部



第二部長に転任した。同年四月一日、総務部長兼第二部長となるが、同年七月二五日第二師団長（仙台）に転出した。

(12) ロシア陸軍の将校。一九一八年ウスリー・カザーク軍団のアタマンとなり、同年八月にシベリア出兵が始まるとカザーク部隊を率いてハバロフスクに入った。

(13) ツイブキンによると、この人物はもともペテルブルクの実業家で、その後コルニロフの副官を務めた経歴を持つという。日本でボルディレフと面会し「日露協定」をまとめようとした後、同年四月にはオムスクに現れた。この時、イギリス総領事の客車内でシベリア・カザーク軍団の代表と反コルチャーク・クーデターの相談をしたが、協議は不調に終わったという。Пинки. Гражданская война. С. 44. また、デニス・リヤホフは、一九二〇年一月末にウラジオストクに成立した臨時沿海州ゼムストヴォ政権に対して、同年三月にアメリカ領事館は、ザヴォイコの編んだロシア憲法案を示したと述べる。Ляхов Д. А. Большевикские модели политического устройства Дальнего Востока России (конец 1919 - 1922 гг.). Хабаровск, 2015. С. 64; Пинки. Гражданская война. С. 156. また、同年末にクルバートフは再び来日し、横浜グランドホテルに止宿した。外務省記録四・三・一（要視察人及団体）二六（露国人之部）第三冊「外秘乙第七一五号」（一九二〇年二月二日）、同「外秘乙第二八号」（一九二一年一月二二日）。沢田和彦『白系ロシア人と日本文化』成文社、二〇〇七年、二七六ページ、および沢田和彦『日露交流都市物語』成文社、二〇一四年、二二八ページに彼についての言及がある。なお沢田は彼の本名を「フルハトフ」としている。

(14) 一九一八年一月、神野勝之助（一八六八—一九二八）の後任として大蔵省理財局長となり、臨時西比利亜経済援助委員会の委員を引き継いだ。『西比利亜経済援助ノ概要』創立後一年間ノ事務報告』（西比利亜経済援助調査書第一七号）外務省西比利亜経済援助部、一九一九年、一〇ページ。

(15) カザーク出身のロシア陸軍将校。二月革命後の一九一七年七月にロシア軍総司令官に任命されるが、翌八月臨時政府に反乱を起して失敗。逮捕されたが、十月革命後に釈放され、同じく陸軍の軍人であるカレージンらとともに義勇軍を起して白系運動の先頭に立ったが、一九一八年四月に戦死した。

(16) コルニロフと同じくカザーク出身のロシア陸軍将校。一九一六年に陸軍騎兵大将に進級した。二月革命に反抗的でドン地方に左遷されるが、ドン軍管区の軍団アタマンに選出される。コルニロフの反乱を支持して臨時政府から解任を命じられたが、軍団の支持を背景に居座った。その後十月革命が起こると臨時政府への忠誠を表明し、コルニロフらと白系運動を進めたが、カザーク軍団の支持が得られず、一九一八年一月に自殺した。

(17) 日賀田は、シベリア出兵開始直後の一九一八年八月に発足した臨時西比利亜経済援助委員会の委員長を務めていた。なお、外務省から松岡洋右（一八八〇—一九四六）がこの委員会に入り、実務を担当した。原暉之『シベリア出兵：革命と干渉一九一七—一九二二』筑摩書房、一九八九年、四〇八ページ。細谷千博『ロシア革命と日本』（近代日本外交史叢書四）原書房、一九七二年、二二八ページ。

(18) 細谷『ロシア革命と日本』第三章「日本とコルチャク政権承認問題」。特にその二二〇—二二六ページ。

(19) ボルディレフの本の注釈によると、副官のグコフスキーがコルチャークに持参したという。Болдырев. Директория, Колчак, интервенты. С. 541.

(20) «Борьба с большевизмом... является общим делом всех культурных стран»: записка генерал-лейтенанта В. Г. Болдырева. Март 1919 г. // Исторический архив. № 1. 2013. С. 76—78; Hosking, "A Democratic White General," pp. 183—184 を参照。

(21) これについては、註六を参照。

(22) Болдырев. Директория, Колчак, интервенты. С. 540—541.



- (23) *Boldyrev*, Директория, Колчак, интервенты. С. 238–239. チタは、サバイカルの都市で、当時セシヨーンフの根拠地になっていた。
- (24) “Russian People in Desperate Position: Ground Now between Bolshevism and Political Reactionaries, Says Gen. Boldyreff—Rights of Masses Ignored by Both — Former Commander-in-Chief Against Bolsheviks Says Neither Faction Can Win,” *The Japan Advertiser*, August 9, 1919, p. 10.
- (25) *Дружное А. Между двумя большевиизмами*. Paris, 1919.
- (26) *Boldyrev*, Директория, Колчак, интервенты. С. 239–240. どのような計画に参加を打診されたのか興味深い、具体的な記述がない。
- (27) *Цинкин*. Гражданская война. С. 138–140.
- (28) Motosada Zumoto, “The Problem of Russia: Cause of the Present Calamities in Siberia and the Cure,” *The Japan Advertiser*, December 12, 1919, p. 6 and December 13, 1919, p. 6. 元の記事は、『国民新聞』一九一九年一月六日二面および同月十三日三面の「月曜論壇」に「露西亜問題（上）西伯利政局」、「露西亜問題（下）終局の解決」として掲載された。これはちょうど、ボルディレフが頭本と会った時期に当たる。
- (29) 原『シベリア出兵』五〇九―五一〇ページ。
- (30) すべての日付に対して記事があるわけではないが、著書に示された限りでは、萩野が十一月五日（イニシャルのみだが推定）、同二日、同二六日、一二月五日、同八日、一九二〇年一月一日の計六回、他は、一二月一三日高橋少佐（名は不詳）、一九二〇年一月一〇日桑木崇明中佐（一八八五―一九四五）、一月一二日再び桑木中佐がすべてである。なお、記事の内容から見て、桑木は中島の後任として参謀本部総務部長に就いた武藤信義陸軍中将（一八六八―一九三三）の使いだっ

- たと見られる。
- (31) マルセイユ行き船の切符を購入したものの、乗船しなかったと云う。*Boldyrev*, Директория, Колчак, интервенты. С. 294. なお、ボルディレフの著書には書かれていないが、ちやうどこの頃、彼が教官を務めたところのあるニコライ陸軍大学校がトムスタからウラジオストクに疎開することに決定し、一九一九年一月に三本の列車に分乗してトムスクを出発し、その最初の二本が二月にウラジオストクに到着していた。ボルディレフは、当時も員外教授として大学校に一定の影響力を持っていて、大学校の存在を自分の政治的資源として期待したに違いない。*Ганин*. Попытки советизации. を参照。
- (32) 外務省記録四・三・二（過激派及不逞団）一―四―二（露国）より「外秘乙五号」（一九二〇年一月一〇日）。
- (33) *Boldyrev*, Директория, Колчак, интервенты. С. 292–293.
- (34) ヴラジミール・カップリ（一八八三―一九二〇）は、ロシア陸軍の将校。コルチャーク政権末期の一九一九年二月に東部戦線司令官に任命されたが、いわゆる「氷の行軍」中に健康を害して一九二〇年一月に死去した。コルチャーク政権消滅後、シベリアから極東に移動してきたその旧政府軍は、彼の名を取ってカップリ軍と呼ばれた。

- (35) Hosking, “A Democratic White General,” p. 173.